文化で滋賀を元気に！シンポジウム　２０１８
「アーティストと地域が生み出す新しい文化―その可能性と道筋―」
（2018.11.24　　コラボしが 21　大会議室）
抜粋要約

司会　　滋賀には多くのアーティストが移住し創作活動しているのに、作品の発表、販売は京都、大阪になっている。そこで、**アーティストと地域をつなぐことで新たな文化が生み出せないかと願ってシンポジウムを開くことにしました**。1 部は基調講演、2 部はパネルディスカッションです。基調講演の椿昇・京都造形芸術大学教授は、現代美術作家として活躍の一方で、瀬戸内国際芸術祭では小豆島プロジェクトのディレクターとして地域を巻き込んだ取り組みをされた。今日は「アートは地域に何ができるか」と題して話していただきます。

椿　　今はどこもかしこも地域・地方芸術祭という感じです。これまでの地域おこしは箱物でしたが、お金がなくなってアーティストが格安で働くことを発見して、日本中に広まったというのが現実です。しかし、大成功かというと、実は若いアーティストは非常に安いコストで作品をつくって借金を抱え、持続可能性がない。いきなり厳しいことを申し上げるが、決してバラ色ではないということです。

地域芸術祭で僕は草の根系ディレクターです。一発イベント型ではなく、**持続可能な地域社会をつくっていくのが僕のプロジェクト**で、たいへん地味です。外国人の作家に頼らず、地域のために内需をつくる。

まず学生たちのチームをつくって地元に綿密な調査に入る。小豆島はプライドが高くて、「いっぱい人が来てほしくない」「瀬戸内国際芸術祭、何だ、それ」と言われる。ところが、実際に始まると、都会からイケメンや若い女の子たちがどっさり来たので、おじいちゃん、おばあちゃんたちが喜んで総崩れです。アートが好きな人は大騒ぎしたり、ごみを捨てたりしないし、毎日がわくわくする。あるおじちゃんは朝から晩までお客さんを相手することが生きがいになって、瀬戸芸が終わるとガクっとしている。地域の人たちが楽しみにしてくれるように変わりました。

地元の人たちと酒を飲みながら話をし、仲の悪い町長と議会の間を取り持ったりする。地域芸術祭のディレクターは、そういうことが苦にならない人でないとうまくいかない。地元の人と調整を重ねるうちに、「庭に作品を置いてもいい」「土地を提供する」となる。そういう状況にもっていかないと成功しない。

いろいろな地域のプログラムを組むのは大変で、作品を置くだけではなくて、カフェやレストランの配置まで考える。地域全体がアートを中心としたアミューズメントパークになるように、動線などを計算しないといけない。

ゆるキャラのデザインや道路のカラー舗装の色を頼まれたが、逆に説得して地元商店を巡るスマホアプリの開発や未来につながる企画書づくりを提案して実行しました。島へのアクセスが重要で、神戸からのフェリー直行便を交渉で実現したのが最大のポイントでした。住民との関係をつくるため学生や若い人を大量に入れました。大学のゼミの授業、実習の場として単位を与える。一緒に学ぶ場として廃屋に無料宿泊所をつくり、今どきの学生やデザイナーに欠かせない高速 Wi-Fi

を設置してもらった。

有名アーティストの作品を置く従来型は、観客にはいいが、住民の意識改革につながらないので避けました。大阪や東京のデザイナーが長期滞在して活動するデザイナー・イン・レジデンスをしました。高速の光ファイバーさえあれば、仕事はすごく進むし、海で泳いで魚を釣って食べたりできるわけで、まちなかのオフィスより快適に仕事ができると喜んでくれました。空きビルを学生たちと一緒にリノベーションして使えるようにし、学生を動員してＳＮＳで告知していく。宣伝費がかかりません。

行政も巻き込む。町の全職員がそれぞれ作家担当になることで、**全員が当事者**になる。アートにすごく詳しくなって、自然に自分たちのものとしていくんですね。

県の予算でやっている僕らのチームは、少ないお金を回しながら、あとは努力、ファイトみたいな感じですね。せめてトイレぐらいはと、建築家に頼んで格好いいものをつくりました。オリーブの会社が「これは面白い」と 1000 万円ほど寄付してくれたので、ビートたけしさんとヤノベケンジさんがつくった怪物みたいな作品を囲う美井戸神社をつくった。神主さんや建築家、仲間を引き入れたプロジェクトです。これが成り立ったのは、小豆島八十八カ所という素晴らしい宗教文化があるからです。農村歌舞伎もあり、**もともとの文化がしっかり根付いている。それをうまく現代のアートと合わせるのです。**地域の棚田保全も、アートが入ることでクリアしていきます。

小豆島の中心産業はお醤油です。まだ木桶で手作りしていますが、ほとんどなくなって残った２つの木桶で細々と作っていました。これを生協の職員さんに頼まれて千数百本の生産まで回復させました。醤油会社自らが桶づくりまで始めて、技術が引き継がれたんです。最高級の小豆島のお醤油を使ったつくだ煮屋さんは、北海道の羅臼の一等昆布を使って素材一発勝負。本物をつくっていると、支持者がすごく増えてくる。地域芸術祭もきちんと本物志向でやっておかないと、地域も続かない。

造り酒屋さんの納屋をコッペパン屋にした。米麹のコッペパンの単品勝負で、すごくはやっています。３年に一度の瀬戸芸目当ての観光客相手ではやっていけない。地域の人が通い詰める習慣づくりがうまくいき、今は地元の人でほぼ満員です。かつて塩を置いていた倉庫を建築家の設計でジェラートハウスにした。店主は東京から移住してもらったが、自然環境のいい所で子育てしたい人が結構いる。有名シェフでも条件さえ合えば来てくれるのです。

インドから作家に来てもらいました。インドに赴いて展覧会やビエンナーレを見て、作家と話して、日本の環境になじむか、地域の人たちと関係が築けるか、作品はもちろん重要だが島に来てもらって大丈夫という人を選んだ。さらに、次世代の有望なアーティストやキュレーターをどんどん入れて、実践経験を積んでひとり立ちしてもらおうとしました。

ディレクターの大事な仕事は、いかに企業協賛を引っ張るかです。企業を回り、お金を集め、作品を選んで終わりではない。「オリーブのリーゼント」という有名になった作品は、地元の造船所でつくりました。**地域型アートで大事なのは、いかに地元の産業を使うかです**。税金が投下されたものは全て地元の産業に落ちるような仕組みをつくります。

農具小屋をきれいなギャラリーに変えました。地域芸術祭をやると廃屋、廃工場のリノベーションに入ります。若手の建築家のステージがいっぱいあります。**地域型アートは、人間関係やモノ、コト、全てを再生していくという感じです**。つなぎ方を変えて、シームレスに回るようにして

いく。仲たがいしている人に「仲良くしましょう」と言ったり、関係の再構築も多いです。
　アートが大好きになったおじいちゃんは人気があり、わざわざ東京から会いに来る人もいる。また、演劇集団と住民が一緒に面白くやったりします。**一番大きいのは地元の人が自信を持ち始めたこと**。いろいろな波及効果もあり、町長がびっくりしていた。小豆島への移住が増え、年間１５０人くらいあるのかな。うちの卒業生も移り住んで、子どもが産まれ、町の職員になった。こういうことが瀬戸芸で起こったのです。

　ほかに目指していることがあります。**アーティスト・イン・レジデンス**です。瀬戸芸もそうですが、アーティストが地域に入って、しばらく滞在して制作する。滞在制作型の非常に大きな施設を企業に提案しているところです。コンセプトは大きな公園整備、森や池、レジデンス施設をつくる。土地の植生に合わせた森です。
　アジア、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、いろいろなところにレジデンスがあります。南米のコロンビア、ミャンマーやタイの山奥、アフリカにもあります。若いアーティストたちがレジデンスを行ったり来たりする中で、友だちの輪ができる。「日本　にもおいでよ」と言いたいが、日本にはレジデンスが少ない。
　レジデンスをやっていくことで、がらっと変わった地域があります。瀬戸芸や越後妻有だけではない。地元の人たちがちゃんとやっている地域は続いています。重要なのは今はカフェ。いいカフェやベーカリーには必ず人が集まってくる。高品質のカフェとかベーカリーがつくれるかが問題です。建築コストはかからない。仮設に近いのが多い。現代建築家がローコストで面白いものを建ててくれる。あとはいいレストランがあると大変素晴らしい。近くにオーガニック農園をつくって、料理を出すようにすれば、ランチ３０００円でも払ってくれる人がいっぱいいる。インスタグラムとかロコミだけで人が来るようになります。オラファー・エリアソンという世界的なアーティストは、巨大な工場で作品を制作するのでスタッフがたくさんいる。そのスタッフたちにいい食事をさせるために、彼はアーティストのコックを引き抜きます。
　アートは、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）の中核にあります。レストランやカフェにはライフスタイルデザインのコーディネートが入ってくるわけです。レッジョ・エミリア教育という児童教育システムがイタリアにあり、ギャラリーや小さい図書館をつくっています。日本版のレッジョをつくって、子育て中のアーティストがレジデンスに来たら、子どもを預けておく。そういう施設をつくらないと、来てくれる層のレベルが上がらない。そういうことのエンパワメントというか、僕がやっていることがお分かりいただけると思います。ガーデニングに近いんですね。回遊式というか、循環するようなシステムを設計する。そういうのを企業に提案しているわけです。

　もう１つ、今年２月に京都市で「アーティスツ・フェア・キョウト」を初めて開催しました。名和晃平さんとかヤノベさんとかキャリアのある作家が、大学出たてのアーティストを厳選した販売会に近いものです。２日間で２０００万円ぐらい売れた。ギャラリーが入っていない新しい仕組みで、作家に１００％入ります。京都府と文化庁が支援してくれて、成功しました。
　なぜ、それをやったか。昨年は世界で７兆３０００億円のアートの取り引きがあり、そのうち米国は４０％超で１位、２位にとうとう中国がなりました。英国が３位に落ちて２０％ぐらい。フラ

ンスは７％で、その他の国というカテゴリーの中に日本があって１％もない。しかも分析すると、日本の取り引きの３割はポストカードやポスターといった美術館や展覧会で買われるグッズです。作品はほとんど買っていない。それでアーティストが生きていけるわけがない。

なぜそうなったのか。アーティストや美術館が経営努力してこなかった。美術館は自分で稼がず税金でやっていけるからです。米国の美術館は税金が投入されないから、銀行や投資グループの人たちをメンバーにして資金を集めて運営している。米国のいいところを真似していないのです。明治になって岡倉天心が芸大をつくった途端、芸術は才能に恵まれた人のものになった。江戸時代は浮世絵なんか誰でも買えて、アートはみんなのものだったのに、明治になるとアートが権威化されて、民衆はポップカルチャーに行ってしまった。アニメや漫画です。そちらの方は大変健全です。ちょっと駄目になったら連載を打ち切られるし、大変厳しい競争にさらされているからです。美術の場合は税金と補助金でなんとなく既得権益が守られたことで、衰退したんです。

芸大の美術工芸に学生が来なくなった。「美術工芸はおじさんとおばさんの世界」になって、学生はキャラクターデザインやイラストレーションに行ってしまった。美術工芸イコール、シニアのものになってしまったのです。デパートの美術画廊で買うのは、ほとんどがシニアの富裕層で１０年、１５年先の市場はどうなるのか。

将来を考えて、瀬戸芸に来ているような若い人たちが買いたくなる作品をラインナップにしないと次はない。それで何とかしようというのが京都のアーティスツ・フェアで、大きなファンドが投資話を持ってきてくれるようになった。こういうところから、根本的につくり替えていかないと駄目です。

グローバルマネーと地域芸術祭をうまく結んで循環させ、少しでもベターな未来が来るようにしなければいけないのが、僕が働いている現場です。世界経済の中で地域がアートをどうしていくか総合的に判断する時代になって、**単にアートだからアート作品を並べて終わりではなくなった**ということです。

パネルディスカッション

十倉　椿さんのパワーポイントに「**観光より関係へ**」という言葉がありました。これまで地域芸術祭は観光イベントだったが、小豆島では観光より関係だとおっしゃった。私たちの「つなぐ」と同じ問題意識です。アートと地域をつなぐ、アートによって人と地域をつなぐ、人と人をつなぐ、そこから何か生まれるのでは、と考えています。今日の議論の核心は、**アートと地域をつなぐにはどうすればいいか**、ということになるかと思います。

椿さんのほか３人のパネリストですが、笹原さんは市民の立場で手作りアートイベントを、松岡さんは草津市職員として行政側から地域とアートを結び、藤原さんは大阪から移住した大津で創作活動をされている。三人三様の立場から発言していただきます。

笹原　「**アートインナガハマ**」は地域が空洞化、高齢化する中でまちをどう盛り上げていくかということで、３２年間続けています。毎年１０月に開催、全国から２００組の作家さんが集まって、商店街にブースを出して展示・販売しています。われわれもお世話するだけではなく、いろいろな自主

企画を盛り込みながら、２日間のお祭りという感じでやっています。

アートと市民文化の拡大再生産を目指しています。第４世代として引き継いでいるうちに、アートへの関心が高まり、全国から集まってくる方々にいかに楽しく、興味を持って作品を買ってもらえるかを第一にしてきたつもりです。理想に近いところで言うと、優れた作家さんの作品発表の場所を作り、将来性のある作家の活動を支援する。作家同士や市民同士の交流の場を作り、市民の芸術への理解を促進し、新しい世代の担い手を作る。これらを柱にして持続可能な形でやっていこうとしています。

商店街のメンバーや市民の手作りアートイベントで、応募作家の選考はアーティストではなくて私たち市民でやっています。市民目線で作品の写真を見ながら、これはいけるんじゃないかとか言いながら選んでいる。基準はなく、どれだけ作品に思いを込めているか、しっかり見ていこうとしています。今年は応募が３００近くあり、１００人ほどが落選です。

古い町並みの狭い通りにブースを出し、パネルなどの調達、組み立て、受け付け、資料配布などを商店街の人たちが担っています。見に来られた人が参加して立体の黒板を作ったり、好きな絵を描いたり、人形劇を子どもたちに楽しんでもらったりしている。ワークショップなどで子どもたちがアートに触れるエリアを作り、米原市在住の切り絵作家、早川鉄兵さんや県立大生、地元のアートスクールの子どもたちの作品などを展示しました。

使命の一つに、アーティストの卵の発表の場を作ることがある。作品を展示し、売れれば自信につながるのではと思っています。ロサンゼルスで絵を描き、CM にもなった若手の２人組アーティストに、工事中の壁面に絵をかいてもらい、工事中もアートを楽しめる空間ができて喜んでいます。資金面や手法に問題はあるけれども、**継続して町中にいかにアートを根付つかせるか、手探りでやっています。**

十倉　笹原さんは若い時に６、７年、イタリアのベネチアでガラス工芸の勉強をしていて、町や暮らしがアートに包まれているのを経験した。この長浜も同じようにアートに囲まれた街にしたいということをおっしゃっています。

松岡　**「アートフェスタくさつ」**の担当者ということでお呼びいただきました。平成２２（２０１０）年度から開催していて、今年度は滋賀県とびわ湖芸術文化財団の主催「美の糸ローアートにどぼん！」と連携して、１０月に草津の町中で開催しました。7 つのアートイベント、市役所や公園、お寺、本陣など１４会場を巡り、アートを通じて町の魅力を感じていただく回遊式まちなかミュージアムです。小学低学年や幼稚園のお子さんをターゲットにした**アートの体験イベントや地域課題に結び付けたアートで、中心市街地のにぎわいづくりを提案**できたらという思いです。

３つのイベントで構成されていて、ひとつは市役所でのわくわく体験ひろばというワークショップとクリエイターズマーケット、ほかに草津公園の隣でのアートマーケット、最後は夜のアートフェスタで草津川跡地公園での野外映画祭です。市役所のわくわく体験ひろばでは、県内の美術館、博物館、地元の文化団体の協力で２６ブースを出し、延べ３０００人がワークショップを体験してもらった。地元のアーティストによる体験型、交流型のワークショップでは１日２０００人ぐらいのお客さんがありました。

これまでのイベントは地元の文化団体の展示や発表で、人が集まらず、特色もなかった。アートを使って何ができるか考え始めたところです。アートフェスタの予算は限られ、地元の人材や場所を有効に使うようにしました。力を入れたのがワークショップで、アートを近寄り難いという方もいるので、まずは体験していただく。草津はヒト・モノ・情報が交流する宿場町の歴史があるので、出会いや交流が生まれる空間づくりをしたかったのです。

昨年度からワークショップを通して地元の文化団体の活用が進んできたが、なかなかアーティストとの関わりがなく、どうにかしたいという思いがありました。２８（２０１６）年度に文化振興計画ができていろんな人と出会った中で、賛同してくれるアーティストにコーディネーターになってもらい、ワークショップでアートに親しんだ後、アートマーケットに来ていただける流れをつくりました。

イベント自体は一日限りですが、そのレガシーをどのように引き継ぐかが大事だなと思っています。草津市としては、アートをツールとして観光や医療、福祉、教育など、さまざまな分野に結び付け、地域課題の有効な解決につなげていきたいと思っています。このイベントを通じて、アートや文化振興への印象が変わり、市役所内部や事業者からアーティストを紹介してほしいという声をいただいています。草津市全体で文化振興の機運が高まって、次のステージに進むような準備が整ってきたんじゃないかと今は感じております。

十倉　松岡さんは、学生時代にまちづくりの分野で有名な先生の下で勉強されています。若い世代への期待を込めて来ていただきました。

藤原　私は「アートがつなぐ」ということで、彫刻家としての活動を紹介します。滋賀県に２３年前に移ってきました。大阪の雑居ビルの工房では音の苦情が出たりしたので、自分の制作の場所がほしくて志賀町に工房を作りました。当時は地域との関わりがあまりなく、自分中心で周りを見ていなかった。鉄を使う彫刻なので、夜中に溶接したり、音の問題などあり、近所から怪しまれていました。サリン事件のあとの頃で、私は坊主頭で白いつなぎを着て制作していますし、周りに鉄の塊が置いてあるので、警察が２回ほど来ました。これをきっかけに地域に理解を求めるような意識に変わっていきました。

ものを作ることは、いろんな人との関わりが非常に重要で、アートと地域をどのようにつなげればいいのかというところにウエイトを置くようになりました。地元の人から、何をしているのか見せてほしいと言われることが増えたので、作家の工房を公開する「かんじる比良」というイベントをやりました。私が発起人で数年続け、いろんな人の参加がありました。でも、アートと言っていてもなかなか本質は伝わりません。アートの理解につなげる方法を模索しているあるときに巨大シャボン玉と出会い、アートの視点でワークショップを展開していくとアートの本質が伝わりはじめました。そこで、「シャボン玉研究所」というのを設立しました。いろんな人や素材に関わりを持ってもらうワークショップを主にやっています。２０１２年にブータン王国で巨大シャボン玉の写真が巡回展示されました。２０１７年に日吉大社へ巨大シャボン玉を消える彫刻として奉納したところ、ヤフーニュースで取り上げられました。また、島根県の「隠岐しおさい芸術祭」では鉄のバス停オブジェを現地制作する傍ら、観光客と住民が一緒にワークショップをしたのをき

っかけに巨大シャボン玉が地域に広がり、島根県の学校の文化祭で巨大シャボン玉ワークショップを生徒主体で７年ぐらい続けてくれています。アートの理解につながるということで、高島市と教育委員会が運営し、１９９８年から続いている「藤樹の里キッズアート」に指導者として 5 年前から参加しています。

私が運営する現代美術の展覧会「CAF.N びわこ展」では、作品と空間にしっかり焦点を合わせています。展覧会はアーティストが中心になって運営していますが、これからの時代かなり厳しい面もあると思います。展覧会の本質は損なわずに、地域と一緒にいろんな人を巻き込んで展覧会が運営できればと思っています。

日常と非日常がバランスよく存在することが非常に大事ではないかと考えていて、特別視を強めたり、難しいものと思い込むことで、文化に対する意識が薄らいでいく危機感をもっています。まじめに遊ぶ。それを続けることで、感じる心が育まれ、そこからアートの力が生まれる。ヒトの心が動くアートの力はすごいと感じています。

十倉　椿さんにお伺いしますが、アーティストにとって地域と関わって創作する意味というのは、どうなんでしょうか。それから３人へのアドバイスがあれば。

椿　アーティストというのは難しい言葉で、自然とか、世界とか、大地とかに近い。それら全部が含まれて、アーティストは何をしていてもアーティストになる。アーティストはいろんな分野、種類、役割があって、得ている収入も全然違う。地域でどういう仕事をしていくかは一概には言えません。

３人のお話を聞いたら、それぞれ地域に根差して継続的に活動されている。あと**必要なのは相互の交流で、それと海外との交流です。**アーティスト・イン・レジデンスは世界中とつながっていて、アフリカやフィリピンとかで面白い活動している。そういう所と交流するだけで全然変わってくる。地域はいいんだけど、その地域というのは世界中にあるわけです。世界の地域間交流がないと、どうしてもドメスティックになってしまう。そんなにお金のかかることではなくて、LCC でパッと行けます。国際ネットワーク、草の根のネットワークを作るのはすごくいいと思うし、滋賀に来てもらうと世界中の人が喜ぶから、ぜひ。

それと、県全体で情報を共有した方がいい。せっかくここまでやっているのに、ばらばらだったらもったいない。やっている人同士の交流とか、県全体でどういうことが行われているのか、マッピングが必要かなと直感的に思いました。なぜかというと、中国の広州の下町に行くと、変な雑貨屋さんがあり、その雑貨をやっている若者のヒーローは日本人です。誰も知らない、高円寺の地域開発している兄ちゃんです。そういう草の根の「かっこいいよね」みたいなネットワークや情報交流が、今は SNS とかでやりやすくなっている。交流するとブラッシュアップしていけるので、いいかなと思います。

ここまでベースができているんだから、あとはつながるということでしょうね。滋賀県の中でもつながるし、世界でもつながる、特に近隣のアジアとつながっていくのがいいと思います。

十倉　つながるということでは、松岡さんが草津のフェスタが終わった後、お寺さんを回られました

が、それはどういうことで。

松岡　「アートでどぼん！」でお寺を活用したので、来年は草津市の方でも活用させていただきたいということで訪問しました。お寺によってそれぞれですが、共通しているのは地域住民として、お寺も草津が盛り上がることに貢献したいという思いでした。

お寺がある地域は、草津川跡地公園を境に駅寄りが商業施設でにぎわっているのに対して、歴史的な景観が残る宿場町で、にぎわいが届いていない。新しいタワーマンションが建っても、住民の顔が見えない状況で、防犯面でも不安に思われている。こういう**アートフェスティバルでにぎわいが生まれれば、顔が見える関係ができる**。街の価値を上げることにもつながるので、どんどん活用してもらいたいという声をいただきました。

十倉　お寺は、かつては門前町でにぎわう所ですよね。そこを活用して地域とつながっていくということですね。笹原さんは、つながりを広めようと考えつつあると聞きました。

笹原　今までは募集だけでしたが、地元も含めていろんなところから交流しようと言われています。アーティストが地元で創作活動して、作品を地元で展示して、地元の人たちの評価を得る機会が少ないので、そういう活動の場になればというのが一つあります。今回のアートインナガハマで、米国からのアーティストに作品を展示してもらった。先ほど椿先生がおっしゃったように、海外の作家とつながることで、新たな視点ができるんじゃないかと思ったので、来年以降も取り入れていけたらと思っています。

十倉　藤原さんが最も関心があるのは、「アーティストは飯を食っていけるか」ということだそうです。椿さんの話にもありましたが、私たちも考えなければと思いました。つながるということでアーティストが単に利用されるだけでは面白くないですよね。藤原さんは地域との関わりで、作家はどうやって生活していっているのか、どうありたいと思っておられますか。

藤原　アーティストがというより、移住者として地域がよく見えます。地域の良さを発掘しアーカイブを作ることで、仕事が発生する。そうした視点に気付いてもらい、理解されれば、仕事が生まれる、そんな状況を作れたらなと思います。地元で仕事を作るというよりは、できることを単純に考えて地域で仕事ができれば一番いい。展覧会もそこでできたらいいなと考えています。

十倉　椿さんにお聞きします。小豆島が盛り上がるには一朝一夕ではなかったと思います。住民の意識は、アートやアーティストに対してどのように変わっていったのでしょうか。

椿　海外の作家や学生たちが集まってワークショップしたときなんか、石を投げられましたよ。そういうこともありつつ、何やかやしながら前に行くことが大事で、何もいいことばっかりではないわけですよ。だけど、だんだん理解者が増えて、経済効果が出たら、誰も文句を言いません。閑古鳥が鳴いていたホテルがほぼ満室になり、僕に最敬礼です。**最終的にちゃんと経済が回らないと**

駄目で、そこをどう設計していくか、きちんとやった方がいいと思います。

とにかく、よそ者と若者とばか者をちゃんと受け入れてもらえるように説得工作して、よそ者と若者とばか者を入れたら、もうかったぞという成功体験をしてもらうことです。地域を再生するには、どういう経済的なシステムを導入すればうまくいくか、産業構造はどう変えるべきかプログラムして、地道に取り組んでいかなきゃいけない。なかなか一言では言えないのですが、総力を挙げるということです。経済界、商店街、アーティスト、水道局の役人の奥さんとその子どもまで**全部巻き込んで、みんなステークホルダーになってもらわないと難しい。**

地方はロジスティクスがあるなしでがらっと変わる。小豆島ではジャンボフェリーでした。経済界と行政と草の根の市民団体とみんなで考えるんです。どうしたらいいか。ばらばらでやっていると総合的に力が出ないので、そこが大事かな。

十倉　大きな話になってきています。会場からもご発言をお願います。美術館の学芸員の方が来られているので、感想や意見をお話してください。

会場　前半の椿先生のお話、美術館の学芸員は税金で食っているからというのは、ぐうの音も出ないような話でした。いかに持続可能性を追及して地域に根を張っていくか、本当に大事なことだなと思っています。私も笹原さんにご協力をいただき、黒壁スクエアで作品展示をさせていただきました。私のプロジェクトは単発で持続していくのは難しいものでした。いろいろなイベントとかで、つながりを作ったアーティストたちが集ってくれるような拠点として美術館が今後なってくれたらなと思っているんですが、アドバイスをいただけたら幸いです。

椿　乱暴なことを言っちゃいますけど、美術館は作品を売り買いできない。これが最大の問題です。早くいい人材を見つけ、育てて、そして売って、そのお金でもっといい作品を買ったりする。館長はそれができるはずですが、日本では美術館は売り買いしなくていいことになっている。補助金から、ある程度の割合で作品を買ったり、売ったりしながら資産を増やしていくことをやれば、日本の美術館のディレクターもがらっと変わりますね。

日本はアートを売り買いしたら罪悪みたいに思っている。それが自分たちの首を絞め、いい作品を海外に持っていかれる原因になっています。美術館に購入予算を付けてあげてほしい。美術館の学芸員もやる気が出ます。経済システムの中にアートを取り込まないといけない。**経済と離れたらアートだけが死んでいきます。**

もう一つは、金沢の 21 世紀美術館で中学の美術部の生徒とワークショップをして、もう 8 年目になります。ご存じのように**中学・高校の美術の授業はどんどん減って**、アート教育が機能していない。だから、**美術館はすごく重要で、アートセンターとして地域の芸術教育のレベルを上げていくべきです**。高校・中学の美術教員がなくなる時代が来るかも分からん。そういう美術教員に美術館とかに入ってもらえば、教育普及とかいろんな試みができる。欧米ではアートセンターがたくさんあり、地域の人たちの芸術レベルが高くなっています。いろんなところにアートセンターを作っていくといいかなと思っています。そのハブに美術館がなります。だから希望を持ってもらっていいと思う。金沢の 21 世紀美術館では専門の担当がプログラムを作って、金沢市が予算を付けて

くれて、教育普及が継続的に行われている。そういう取り組みを滋賀でもやっていただけたらと思います。

十倉　美術教育のお寒い状況はだいぶ前から進んでいます。長浜でアートラボという場を設けて、絵画教室もしているアーティストが会場にいらっしゃいます。学校教育が問題だということで、子どもや十代の若者に教えているとおっしゃっていました。若い世代を育てることが一つの突破口になっていってほしいと思います。

椿　僕が大学の美術工芸学科長になって 7 年目ですが、学生の卒業作品をアートフェアにかけています。昨年は 800 万円ぐらい売れているのです。同級生同士で作品を買ったり、環境が変わってきた。商業活動が割に普通に行えるようになったのです。そうした学生たちは大津にも住んでいます。ここで制作拠点を持った作家がいっぱいいるので、美術館で展覧会したら変わってくるんじゃないかなと思っています。**若手のホープが多く滋賀に住んでいるので**、いずれ税金をごっぽり収めてくれるようになります。**ポテンシャルもあるかな**とちょっと思いました。

十倉　先生のお話で非常に勇気付けられました。これまでの話を受けて、最後に笹原さん、これからこうしていきたいというのがあれば、お願いします。

笹原　地域にアートが当たり前にある空間を作っていきたいなと思っています。街の中に飾ってあるだけでなく、今の話も含めて売り買いされることで経済や地域が活性されていくことも目指しているので、どんどん進めていきたいなと思っています。

十倉　椿さんのお話を伺って、**アートは**作品を見るだけでなく、これまでと違った角度から**古い枠組みに切り込み、揺さぶる新しい力だと思いました。**それから、椿さんは事前の打ち合わせの時に、**地域芸術祭が単発で終わらない所は、お祭りが盛んな所**だとおっしゃっていた。地域の人たちに文化の素養あるところが成功すると。長浜には子供歌舞伎の伝統があります。滋賀はそういう地域だと思います。